



## “死”に戸惑う医学生（3）

医療法人パリアン理事長 川越 厚



3

2

2

1

0

12

3

0

3

3





(1ページから)

死の三徴を確認し、身体には特別な異常が見あたらなかったので、僕の死亡診断は型通り終了することができた。固い表情で僕の診察を見ていた3人の介護職に、「もうしばらくすると看護師が来るので、それまで待ってください。その前に、山田さんをベッドにきちんと寝かせてあげてください」と伝えた。

「動かしてよいのですか？」

硬い表情の年配のヘルパーが、戸惑ったように尋ねてきた。

「医師が死亡診断をしたので、もう山田さんは生きた人間ではないのです。」

「でも、本当によいのですか？」

再度の質問に、僕も少し苛立っていた。

「医師が死亡診断をすれば、患者さんは法律的にいうと、物としてとりあつかわれるのです。動かそうが、きれいにしてあげようが全く問題になりません。」

ヘルパーと言えども、自宅での死に遭遇することはめったにないのであろう。しかも今回は独居の方の在宅死。その第一発見者が彼女たちである。彼らが戸惑うのも無理はなかった。

2人の帝京大学の医学生は、茫然とした様子で僕の診察を傍で見ていた。死に戸惑っているのは、3週間前に実習に来た東大の医学生だけではなかった。(次号につづく)

## ～パリアンヘルパー2年目を迎えて～ 早川浩美

自分の家の掃除もままならないお気楽主婦の私が、パリアンで末期がんの患者さんの訪問介護ヘルパーになって10月で2年目を迎えることができた。

毎朝今日の訪問予定を確認。ヘルパー単独訪問か看護師同行か、鍵が必要な患者さんか、状態がお変わりないか、移動手段、鍵を事務所に戻すのか…など、今日一日をどんな流れで動くかを確認。

末期がんの患者さん宅への訪問ヘルパー、ご自分に残された大切な時間を過ごしている患者さんとそのご家族の中でのケアになる。

日中おひとりの患者さん、なかにずうっとおひとりで過ごされている患者さんもいらっしゃる。末期がんの患者さんにその日伺った時の病状などにより看護師に連絡を取り、指示を仰ぐこともある。

その時その時でいろんな場面に対応できなくてはならないこともあり、自分のケア能力の至らなさに凹んで帰る日もあるが、残された大切な時間をよりよく過ごしていただきたいと思う気持ちで、また次の訪問にでかける。

こんな私に「あなたから元気をもらってる」「あなたの顔をみるとホッとする」と笑顔でおっしゃってくださる患者さんやご家族がいてくださる。

私がみなさんから元気をいただいているのに…と涙腺の弱い私はいつも感謝感激でうるっとしてしまう。

ようし、これからも頑張るぞ!!



## 10月19日に平成25年度第3回ボランティアの集い

平成25年度第3回ボランティアの集いが10月19日(土)10時30分から、パリアン打合せ卓で10人の参加を得て、開催された。上半期の各ボランティアの活動状況の報告及び今回のテーマである「聞き書き」勉強会が行われた。

### 「聞き書き」をテーマに勉強会



「聞き書き勉強会」の様

### 創設される「聞き書きボランティア」の会員を募集します

【参加申込み先】 ボランティアコーディネーター・川越博美看護部長 又は早川浩美

## 平成25年度第1回「メモルの集い」開かれる

第10回アジア・パシフィック・ホスピス・カンファレンスに出席して

第10回 ASIA PACIFIC HOSPICE CONFERENCE が、10月11日・12日とタイのバンコクで開催されました。この学会は、アジア・太平洋地域のホスピス・緩和ケアの発展をめざしてつくられた Asia Pacific Hospice Palliative care Network が核となっており、今回もオーストラリア、ニュージーランド、日本、タイ、台湾、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ベトナムなどの各国からホスピス・緩和ケアに携わっている臨床家が集いました。



パリアンのスタッフやボランティアも、8年前韓国で開催されたとき出席したことがあります。私がこの学会へ参加する理由は二つあります。一つは参加する人は臨床家が多く、現場からの発信で国際的な意見交換ができるからです。

もう一つは、一度は逢っておきたい方がゲストとして招かれていて、お目にかかってお話が聞けるからです。シンガポールで開催されたときには、今は亡きシシリー・ソンドース先生の講演を聞き、親しくお話する機会がありました。ソンドース先生と一緒に写した写真は今も私の宝ものです。日本からは日野原重明先生や柏木哲夫先生が参加されることもあり、アジアの人たちへの指導的な役割を果たされていました。

今回パリアンからは2題の研究発表をしました。HOME HOSPICE CARE. WHY AT HOME?と DEVELOPMENT OF EDUCATIONAL PROGRAM FOR PALLIATIVE CARE NURSES AT HOME です。



バンコクは、若い人であふれていて、私たち二人は電車や船に乗ると珍しがられてかすぐに席を譲られました。バンコクの町では、高齢者をあまり見かけませんでした。王族を大切にする仏教国で、金箔の寺院や宮殿を多くみかけました。いたるところにある屋台でタイ料理を食べましたがお腹を壊すことなく無事日本へ帰ってきました。(パリアン看護部長 川越博美)

読売新聞の「暮らし」のページに「医療ルネサンス」欄がある。10月30日朝刊の「医療ルネサンス」の「モルヒネ」シリーズ(全5回)の第4回にパリアンでのモルヒネの使用方法(段階的増量)が紹介された。

この「モルヒネ」のシリーズでは、肺の病気の方や心臓病の方などの病気の末期患者さんが訴える呼吸困難やだるさなどを解消するためにモルヒネを使って効果があった例をあげている。

シリーズ第4回は、クリニック川越でモルヒネの1.5倍の効果があるとされているオキシコドンを服用しているある患者さんの苦痛を取り除くために服用量を段階的に増量した経緯が紹介されている。モルヒネを投与しても痛みが残ることについて、川越院長は「医療用麻薬が効かなくなっても増量すると効果が表れる。患者が苦痛を感じなくなるまで、徐々に増量することが大切」と話していて、中島副院長は「患者は我慢せず、痛みを医師に訴えてほしい」と話している。

日本のモルヒネの消費量は、アメリカ、カナダの約30分の1だそう。がん以外の病気への保険適応の拡大や患者さんの苦痛の程度による服用量の増量などモルヒネの使用できる環境の整備が必要だと、この「モルヒネ」シリーズは訴えていると思う。



**伝言板****パリアン新居への引越しは12月28日、診療開始は1月4日から**

現在進行中のパリアンの新居の建築は、順調に進んでいる。12月には竣工する見込みで、引越しは12月28日、診療開始は1月4日を予定している。新年が楽しみですなー。

**ラジオ日経「日曜患者学校～川越厚のがんからの出発」**

- ・川越厚先生出演 ラジオ日経「日曜患者学校～川越厚のがんからの出発」  
毎月第2日曜日21時～21時30分(今月は11月10日「柳田邦男氏を迎えてのシリーズ2回目」)
- ・放送の聴き方：短波放送・ラジオNIKKEI 第1：3.925MHz、6.055MHz、9.595MHz  
放送終了後は、ラジオ日経のホームページ(<http://www.radionikkei.jp/inochi/>)でいつでも聴くことができます。

**【日曜患者学校「柳田邦男氏を迎えてのシリーズ1回目」のあらまし】**

今年、喜寿を迎えられた柳田さんは「ひとの命は年令に反比例して過ぎていく。十年一日の如く過ぎていくという感じです」と感想を述べておられた。

柳田さんの死生観は少年時代の戦争での恐怖体験が原点であり、NHK記者時代の原爆に関する取材で感じた“人間の生命とどう向き合うか”“他者の命をどう思うのか”について、阪神淡路大震災のときに解るようになったという。災害に遭われた一人ひとりに悲劇の物語があり、原爆では20万人の悲劇が起こったというのではなく、一人のその悲劇が20万件同時に起きた、阪神淡路大震災のときは悲劇が6千件同時に起きたという認識をお持ちだとおっしゃっていました。(続きは2回目へ)

**パリアンが関連する学会及び学習会等のお知らせ**

- ・日本死の臨床研究会年次大会 11月2日(土)～3日(日) 島根県松江市

**11月のデス・カンファレンス、事例検討会の開催予定日**

デスカンファレンス：11月22日(金) 17時～18時

事例検討会：11月15日(金) 17時～18時

**11月のボランティア活動予定**

- ・訪問ボランティア：11月8日(金) 午後2時30分～
- ・デイホスピスボランティア：11月1日、8日、15日、22日、  
(29日は休み)
- ・手作りボランティア：11月26日(火) 午後1時～3時
- ・事務ボランティア：11月16日(土) 午後1時～

**編集後記**

◆パリアン通信の1面トップは、厚先生の記事の指定席。ボランティア通信からパリアン通信に代わってから書き続けて頂いている。読者の皆様も期待しながら毎号楽しみにしていると思う。◆今掲載中の“死に戸惑う医学生”は、死を知らない医学生に「人は例外なく死を迎える」という事実を学習させるため、できる限り死亡診断に同行させて、死に直面して戸惑う状況を記事にされている。◆厚先生は診察は勿論、各種講演、ラジオ出演等で多忙を極めていらっしゃるが、なんとかこのパリアン通信への寄稿は継続して頂きたいと思う